

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第57集

市内遺跡発掘調査概要報告書14

西都原地区遺跡

2009

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市教育委員会では、市内遺跡発掘調査事業として、西都原台地のたばこ天地返しに伴う確認調査（西都原地区遺跡）を実施しました。本報告は、その発掘調査の概要報告であります。

今回は、西都原地区遺跡内に所在する2地点の調査を行いました。結果、第90地点において、弥生時代の住居跡を検出しましたが、これは以前、隣接地の確認調査を実施した際、検出した住居跡と同一であり、弥生時代の西都原台地上には住居が点在していましたことが改めて判明しました。

この調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なことであります。

本報告が考古学の研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた方々をはじめ、発掘調査・整理作業に携わっていただいた方々、並びに地元の方々に衷心から感謝申し上げます。

平成21年3月31日

西都市教育委員会

教育長 三ヶ尻茂樹

例　　言

- 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受け、平成 20 年度実施した市内遺跡発掘調査（西都原地区遺跡）の概要報告書である。
- 平成 20 年度の調査は、西都市大字三宅字原ノ二ノ西他に所在する西都原台地上のたばこ耕作に伴う天地返しの 2 地点を対象に確認調査を実施した。
調査は、平成 20 年 4 月 28 日から 5 月 26 日まで実施した。
- 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
- 本書の執筆は、黒木裕平が担当した。
- 本書に使用した図面作成は、黒木裕平が担当した。
- 本書に使用した写真は、森瀬明宏と黒木裕平が撮影した。
- 本書の編集は、黒木裕平が担当した。
- 本書に使用した方位は、Fig. 1 は平面直角座標系第 II 座標系であり、Fig. 2・3・5 は磁北である。この地点の磁北は真北より $6^{\circ} 10'$ 西偏している。
- 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
- 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版 標準土色板』に準拠した。
- 本文中の（註）はそれぞれの章で番号を付した。
- Fig. 1 の地形図は、平成 14 年 10 月 1 日発行の国土地理院 1 : 25,000 「妻」を使用した。
- 本書に使用した遺構記号は SA（住居跡）、SC（土坑）、SE（溝状遺構）である。

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

第 1 節　調査に至る経緯	1
第 2 節　調査の体制	1
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境	2
第Ⅲ章　西都原地区遺跡の調査	
第 1 節　現況と調査区の設定	5
第 2 節　調査の記録	7
第 3 節　小結	10
報告書抄録	

挿図目次

Fig. 1　遺跡位置図 (1/25,000)
Fig. 2　西都原地区遺跡調査地点位置図 (1/10,000)
Fig. 3　第 90 地点平面実測図 (1/400)
Fig. 4　第 90 地点出土遺物実測図 (1/3)
Fig. 5　第 91 地点平面実測図 (1/400)

第Ⅰ章 序 説

第1節. 調査に至る経緯

西都市は、県内でも屈指の葉たばこの生産量を誇り、中でも都於郡の長園原、三財の小豆野原と並んで西都原台地は中心的な生産地である。しかし、長年の作付けによって土地が弱り、害虫の被害が増加した。よって品質の向上や生産量の回復を図る為に、耕作地の天地返しが計画された。

この天地返しを実施するにあたり、地下遺構に与える影響は大きく、遺跡の消滅が懸念されることを受け、宮崎県たばこ耕作組合と西都市の間で埋蔵文化財の現状保存について協議が重ねられた。その結果、遺構・遺物が検出された場合、現状保存もしくは記録保存を条件に確認調査及び本調査を実施することとなった。

天地返しに伴う発掘調査は平成10年度から15年度にかけて実施したのち、平成17年度には5ヶ年度分の調査結果を纏めた報告書を発刊したが、その後も天地返し実施の要望があり、現状保存が困難な耕作者に対して、前述の条件を踏まえて調査を実施することとした。

第2節. 調査の体制

調査主体	教育長 社会教育課	三ヶ尻 茂樹 泊 宗利（課長） 江藤 和彦（文化財係長） 笠瀬 明宏（文化財係主任主事） 津曲 大祐（文化財係主事）
------	--------------	--

調査担当	養方 政幾（課長補佐） 黒木 裕平（文化財係主任主事）
------	--------------------------------

発掘作業	緒方タケ子・押川ツル・金丸美保・黒木トシ子・児玉徳子 篠原時江・関治代・長谷川クミエ
------	---

整理作業	長谷川明美（社会教育課 埋蔵文化財整理専門員） 中原昭美（社会教育課 埋蔵文化財整理員）
------	---

以上、敬称略

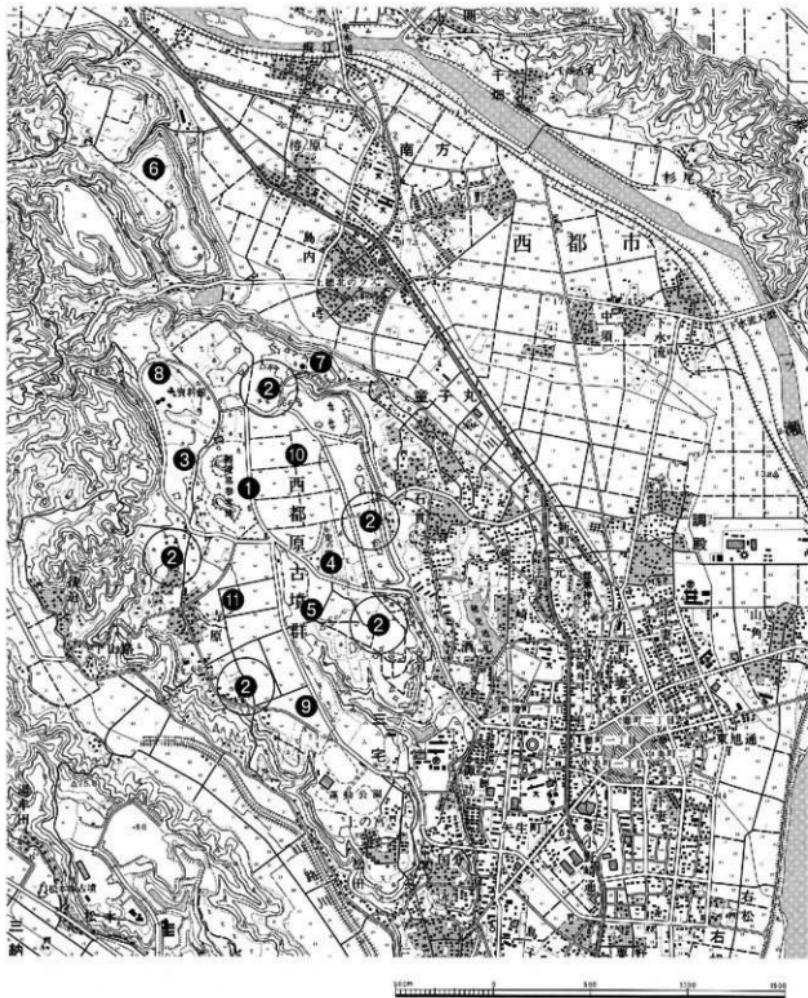
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西、標高 50 ~ 80 m には通称西都原と呼ばれる台地がある。この台地の中央部には陵墓参考地として治定を受ける男狹穗塚・女狹穗塚の 2 基の巨大古墳がその併容を誇っている。また、台地上には柄鏡式を含む前方後円墳 30 基・方墳 1 基・円墳 278 基の大小古墳で構成された国指定特別史跡「西都原古墳群」が所在する。その中には、男狹穗塚の西側で国指定重要文化財の舟形埴輪と子持家形埴輪を出土した 169 号墳があり、女狹穗塚の南東には、西都原古墳群で唯一横穴式石室を有し、全国的にも稀有な土累を周囲に巡らす 206 号墳（鬼の窟古墳）がある。その他にも、南九州の墓制とされる地下式横穴墓が現在までに 12 基、更には斜面に墓道が斜めに穿たれ、それに玄室が取り付く横穴墓と地下式横穴墓の折衷型とされる酒元ノ上横穴墓群も確認されている。⁽¹⁾

このように西都原台地上には数多くの古墳が所在しているが、各種開発に伴う調査の結果、古來から生活が営まれたことが確認されている。西都原台地の北西端には、縄文早期の集石遺構及び後期の土器片・土鍊が多量に出土した宝財原遺跡⁽²⁾、台地北東端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての堅穴住居跡 20 軒などを検出した集落跡である新立遺跡⁽³⁾などが所在する。また台地北側には、縄文時代早期の集石遺構や弥生時代中期から後期初頭の堅穴住居跡を検出した丸山遺跡、台地南側には丸山遺跡同様に縄文時代早期の集石遺構や弥生時代後期から終末期及び古墳時代後期の堅穴住居跡を検出した原口遺跡が所在する。更には台地中央部から東側で弥生時代後期の堅穴住居跡及び縄文晚期 1 軒・弥生時代後期前半 5 軒もの堅穴住居跡などを検出した西都原遺跡が所在する。西都原地区遺跡は前述の丸山・原口・西都原、及び後述する寺原遺跡の 4 遺跡を総称した呼称である。

今回の発掘調査対象地が所在する寺原遺跡は、原口遺跡の北側で現在の寺原集落を中心とした地域である。過去に実施された本遺跡の調査では数多くの住居跡を検出している。僅か約 330m² の道路拡幅部分から 21 軒を数える古墳時代初頭から前期後半の堅穴住居跡、その道路に隣接する約 600m² の畠地では古墳時代初頭から中期前半の堅穴住居跡を 9 軒検出するなど、1,000m² 足らずの面域に、同時期の住居跡が密集していることが判明している。その住居密集地跡の北方約 300 m では、当時「日向型間仕切り住居跡」のひとつとして注目を受けた弥生時代終末期の堅穴住居跡が 1 軒、その北側約 50 m の位置からも同時期の堅穴住居跡を 1 軒検出している。更には西都原古墳群・寺原文群内 197 号墳の東側の畠地から、奈良時代頃の堅穴住居跡を 2 軒検出している。

西都原台地は、数多くの古墳が所在し、古来より墓域として強く認識されている。しかし上記のとおり、弥生時代の集落が広範囲にわたり点在し、古墳時代初頭では台地の北東端、前期では南西端で大集落が形成された可能性を示唆する住居跡群が所在する。古墳時代中期・後期の生活遺構は未確認だが、奈良時代に入ると再び定住民の流入が認められるなど、日常生活の場としても注目すべき重要な地域である。



- | | | |
|----------------------|---------------------|-----------|
| 1. 陵墓参考地 (男狹穗塚・女狹穗塚) | 2. 西都原古墳群 | 3. 169 号墳 |
| 4. 206 号墳 (鬼の窟古墳) | 5. 酒元ノ上横穴墓群 | 6. 宝財原遺跡 |
| 7. 新立遺跡 | 8. 丸山遺跡 (西都原地区遺跡) | |
| 9. 原口遺跡 (西都原地区遺跡) | 10. 西都原遺跡 (西都原地区遺跡) | |
| 11. 寺原遺跡 (西都原地区遺跡) | | |

Fig. 1 遺跡位置図 (1/25,000)

(註及び参考文献)

- (1) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (2) 西都市教育委員会「宝財原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第20集 1994
- (3) タ 「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- (4) タ 「西都原地区遺跡Ⅱ」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第44集 2006
- (5) (1) と同じ
- (6) (1) と同じ
- (7) (4) と同じ
- (8) (1) と同じ
- (9) (4) と同じ
- (10) (1) と同じ
- (11) (4) と同じ
- (12) 西都市教育委員会「西都原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第45集 2006
- (13) (1) と同じ
- (14) (4) と同じ
- (15) 西都市教育委員会「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集 1985
- (16) タ 「西都原古墳研究所・年報」第5号 1988
- (17) タ 「西都原古墳研究所・年報」第2号 1985

第Ⅲ章 西都原地区遺跡の調査

第1節 現況と調査区の設定 (Fig. 2)

西都市教育委員会が平成 10 年度から実施してきた、たばこ耕作天地返しに伴う確認調査は、これまで西都原台地上で 89 を数える地点の約 282,000m²を終了した。平成 5 ~ 7 年度に実施した圃場整備事業に伴う発掘調査箇所と合わせると、台地上に広がる畑地の約 6 割を調査してきたことになる。今回は更に天地返しが予定されている 2 箇所（第 90・91 地点）で確認調査を行った。

第 90 地点は、女狹穂塚の南南西約 400 m、標高約 77 m の箇所に位置する。北隣は平成 14 年度調査の第 74 地点、西隣には平成 19 年度調査の第 89 地点が所在し、また農道を挟んだ東向かいには平成 11 年度調査の第 34 地点と、これまでに調査を終了した地点に囲まれている。なお、第 74 地点では弥生時代終末期の堅穴住居跡 1 軒を検出しており、第 89 地点では住居跡らしき掘りかたから石包丁が出土している。更に南隣では、昭和 62 年度確認調査時に弥生時代終末期の堅穴住居跡の一部を検出している。

第 91 地点は、206 号墳（鬼の窟古墳）の南西約 600 m、標高約 65 m の箇所に位置する。西隣には平成 19 年度調査の第 88 地点、市道を挟んだ北向かいには平成 13 年度調査の第 63 地点が所在する。また、周辺には前述の圃場整備事業に伴い調査を実施した 27 号支線道路より、古墳時代初頭から前期後半の堅穴住居跡 21 軒を検出し、更に、古墳時代初頭から前期を中心とした 9 軒の堅穴住居跡を検出した第 81 地点（平成 15 年度調査）が所在する。

第 90・91 地点の現況は、ともに圃場整備事業により整地された平坦かつ整形な畑地であり、旧地形は不明である。また、第 91 地点において、圃場整備事業により畑地灌漑用パイプラインが埋設された箇所は調査対象地から除外した。なお、調査対象面積は第 90 地点が約 1,800m²、第 91 地点が約 3,900m²である。

調査区の設定は、畑地の形状に合わせ、主として幅約 1.5 m のトレンチを帯状に設定し、必要に応じてトレンチを追加して補った。また、遺構・遺物の遺存状況の確認を行い、遺構・遺物等を検出した場合には、さらにトレンチを拡幅して詳細な調査を行った。

第 90 地点は、長さ約 30 ~ 40 m のトレンチを約 5 ~ 6 m 間隔で 5 本設定、トレンチ間に一辺約 2 m のトレンチを 7 箇所に設け、長さ約 10 ~ 20 m のトレンチを 2 本設定した。

第 91 地点では、長さ約 60 ~ 70 m のトレンチを約 3 ~ 5 m 間隔で 10 本設定、一辺約 3 m のトレンチを 1 箇所設けた。

遺構検出は、岡地点ともアカホヤ火山灰層が良好に遺存していたことから、アカホヤ火山灰層面とした。また、アカホヤ火山灰層の文化層については、各トレンチ内に幅 1.5 m、長さ 2.0 ~ 2.5 m 程のサブトレンチを設定して、遺構・遺物の遺存状況及び土層堆積状況の確認を行った。

調査期間は、耕作物の作付けにできるだけ影響を及ぼさないよう、平成 20 年 4 月 28 日から 5 月 26 日までの間で調整をしながら進めた。

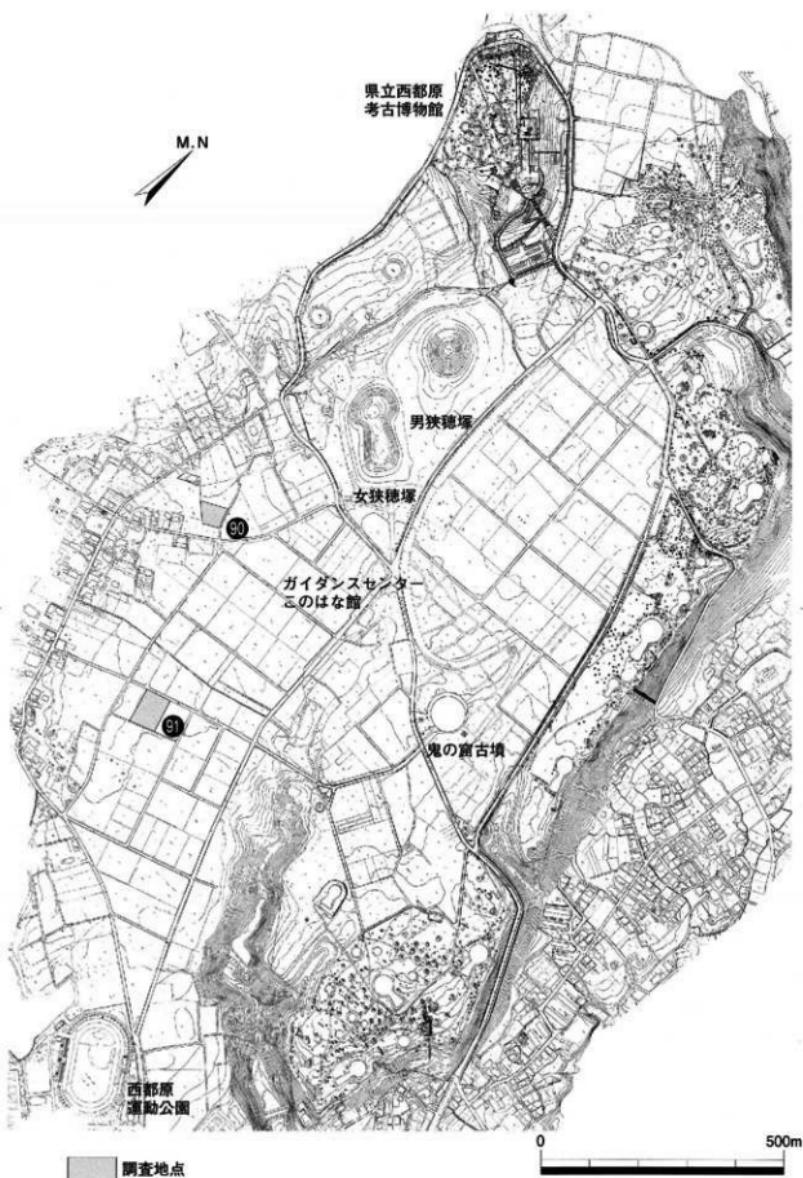


Fig. 2 西都原地区遺跡調査地点位置図 (1/10,000)

第2節. 調査の記録

(1) 第90地点 (Fig. 3・4, PL. 1・2)

本地点は、地表面から40～50cm掘削するとアカホヤ火山灰層が検出された。アカホヤ火山灰層の遺存状態は概ね良好であり、遺構面検出は比較的容易に行えた。しかし、各トレンチで3本程トレンチャーによる搅乱が認められ、細心の注意を要した。

調査の結果、第6トレンチ(6T)の南西端部で住居跡1軒(SA 1)、本調査区南西端に沿って南東から北西方へ延びる溝状遺構1条(SE 1)を検出した。

6Tの南端部を拡張してSA 1の広がりを確認したが、本調査区内で検出できた部分は一部であり、なおかつSE 1がSA 1内を貫いており、現存長約2.6mと約0.3mの2辺による西隅を検出したのみに止まった。そのSA 1の一部を掘り下げるに、深さ約0.2mを測る箇所で平坦な床面が現れたが、柱穴は確認できなかった。また、6T拡張部で検出したSE 1は、7本のトレンチで延長が確認でき、現存長約40mを測る。最大幅は南側の立ち上がりが本調査区域外であるため不明であるが、1.5mを超え、一方、最小幅は約0.5mであり、広狭の差が著しい。検出面からの深さは約0.2～0.5mである。また、SE 1の断面において、長さ約0.3m・厚さ約1cmの焼土(橙色)を検出した。

遺物はSA 1の遺構検出面上、若しくは検出面からの深さ約0.1mで20点ほど出土した。出土した遺物はすべて弥生土器であり、ほとんどが小片である為、本報告書では現存率が比較的高いものを掲載する。

1は弥生土器壺である。器高は9.5cm、復元口径は12.1cm、底径は約5cmと小型であり、口縁は外反することなく立ち上がる。外面全体にタテ方向のミガキが施されており、底面にも不定方向のミガキが入る丁寧な調整であることから、祭祀で用いられた可能性がある。2は弥生土器壺底部である。復元底径は5.8cmを測る。外面調整はタテ方向のハケ目後、部分的にケズリが施される。また、底部の端を指で摘み出したことにより指オサエの痕跡が遺存する。3は弥生土器壺片である。口縁部は「く」の字状に外反し、復元口径は20.4cmを測る。内外面ともにタテ・ヨコのハケ目が施される。なお3と同じような口縁部をもつ土器は他に2点出土した。

(2) 第91地点 (Fig. 5, PL. 2)

本地点は、旧地形が北西から南東方向へ傾斜しており、地表面からアカホヤ火山灰層までの深さは最浅部で19cm、最深部で54cmを測る。アカホヤ火山灰の遺存状態は概ね良好であり、遺構面検出は比較的容易に行えた。しかし、第90地点同様に調査区全面においてトレンチャーによる搅乱を受けており、本調査区域内北側では1本のトレンチにつき2・3本、また南側では第1～10トレンチを横断する幾つもの痕跡を確認した。

第91地点の調査では、第1トレンチで土坑1基(SC 1)のみ検出した。

SC 1は、長軸約1.9m、短軸約0.4mの梢円形である。底面は平坦部と更にすり鉢状に掘られた部分に分かれる。検出面から平坦部底面までの深さは37cmを測る。掘り込み最深部では71cmを測る。トレンチャーによる搅乱でSC 1の輪郭が一部破壊を受けるなど遺存状態が悪く、遺物も出土していない為、時期などの詳細は不明である。

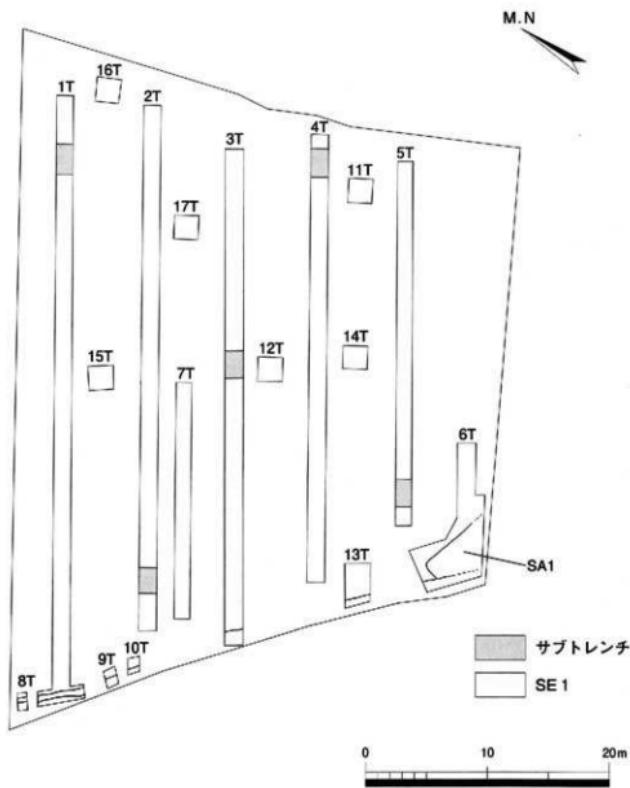


Fig. 3 第90地点平面実測図 (1/400)

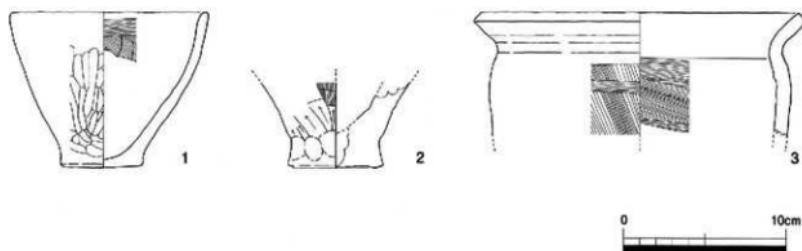


Fig. 4 第90地点出土遺物実測図 (1/3)

M,N

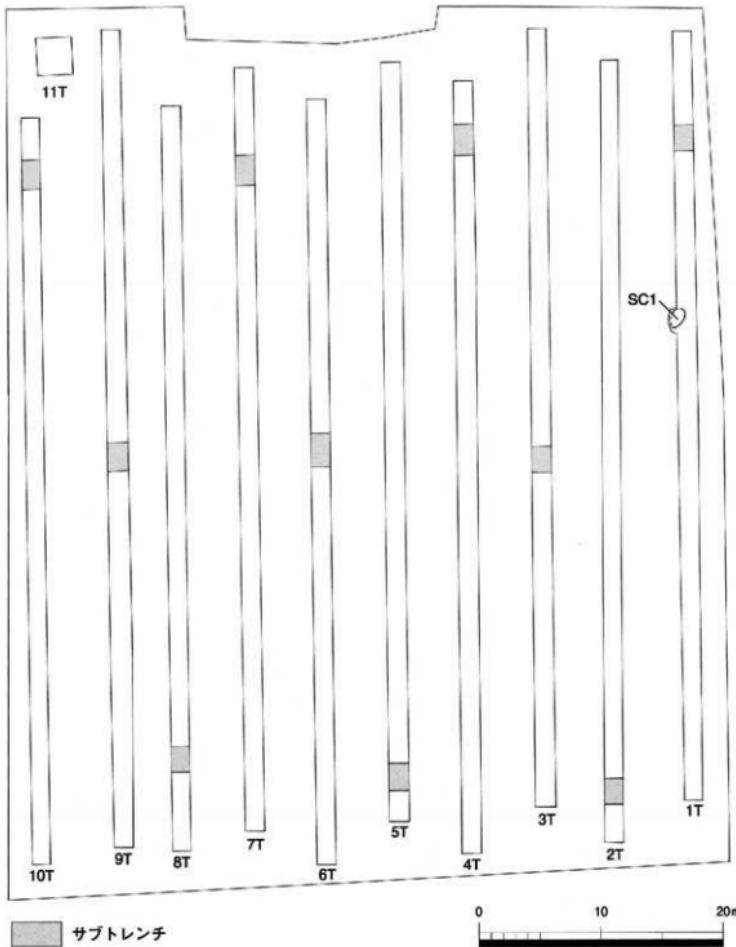


Fig. 5 第91地点平面実測図 (1/400)

第3節 小 結

これまで、たばこ耕作の天地返しをはじめ、宅地造成・墓地造成・圃場整備・駐車場造成等に伴う発掘調査を実施したが、それにより西都原台地について様々なことが判明してきた。

今回の調査では第90地点で竪穴住居跡の一部を検出し、これは昭和62年度の確認調査で南隣接地から検出された竪穴住居跡と同一であることが判明した。これらの成果を踏まえると、竪穴住居跡の西辺は若干弧を描くものの約6mを測る。以前の確認調査では検出した南辺に出入り口と思われる張り出し部が遺存し、これを南辺の中央部と推定すれば南辺は約6mとなる。更に北辺・南辺がほぼ平行であることから、正方形プランと推測する。柱穴は1つ確認できたのみで、中軸上ではなく南北寄りであるため、4本柱の可能性が高い。時期については、以前の調査で弥生時代終末期と比定しているが、今回出土した遺物の特徴から、弥生時代後期後半頃の所産であると思われる。平成14年度調査の第74地点からは弥生時代終末期の竪穴住居跡を1軒検出し、本住居跡検出地点の約50m南側でも弥生時代終末期の竪穴住居跡を1軒検出している。これら2軒との配置は、ほぼ一直線上に約50mと約85mの間隔で並ぶが、密集しているとは言い難く、この地に弥生時代後期後半から終末期の住居が点在していたことを示す。

第91地点においては、約60m西方の地点で古墳時代の住居跡を計30軒、過去の調査で検出している。その為、その住居跡群の広がりが第91地点で確認される可能性が高いことを念頭に置いて調査を進めたが、住居跡群と関連する遺構は検出できなかった。これまでの圃場整備に伴う発掘調査のA・B区、天地返しに伴う発掘調査の第87・88地点と合わせると、第91地点を中心に東西幅約100m、南北長約250mの約24,000m²を調査したことになる。しかし、住居跡群関連の遺構が検出されないという事実は、この集落が台地中央部に展開していないこと示しているのであろう。

台地上の広範囲に点在した弥生時代の住居跡や、台地の周縁部から中央部に進出することを許されなかったものの、台地上から立ち退くことなく営まれた古墳時代の集落の性格を掴むには、さらなる調査を要する。

(註及び参考文献)

- (1) 西都市教育委員会「西都原地区遺跡Ⅱ」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第44集 2006
- (2) タ 「市内遺跡発掘調査概要報告書Ⅲ」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第49集 2007
- (3) タ 「市内遺跡発掘調査概要報告書Ⅳ」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第53集 2008
- (4) タ 「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (5) (1)と同じ
- (6) (3)と同じ
- (7) (1)と同じ
- (8) 西都市教育委員会『西都原古墳研究所・年報』第5号 1988
- (9) (3)と同じ
- (10) (1)と同じ
- (11) (4)と同じ
- (12) (1)と同じ
- (13) 西都市教育委員会「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集 1985



1. 第90地点 第1トレンチ遺構面精査状況（南西より）



2. 第90地点 第1トレンチ土層堆積状況（北西より）



3. 第90地点 第1トレンチSE1完掘状況（真上より）



4. 第90地点 第6トレンチ遺構面精査状況（南西より）



5. 第90地点 第6トレンチSA1及びSE1遺構面検出状況(南西より)



6. 第90地点 第6トレンチSA1遺物出土状況（南より）



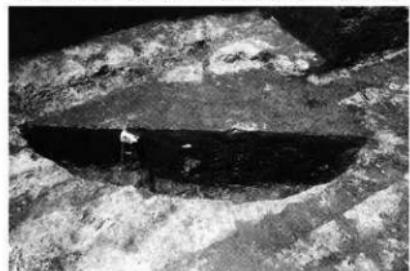
7. 第91地点 第1トレンチ造構面精査状況（南より）



8. 第91地点 第1トレンチ土層堆積状況（東より）



9. 第91地点 第1トレンチSC1造構面検出状況(南より)



10. 第91地点 第1トレンチSC1半截状況（南東より）



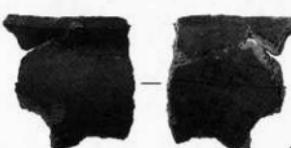
11. 第91地点 第1トレンチSC1完掘状況（南より）



1



2



3

第90地点 第6トレンチSA1出土遺物 (1/3)

報告書抄録

ふりがな	さいとばるちくいせき
書名	西都原地区遺跡
副書名	市内遺跡発掘調査概要報告書
卷次	第14集
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第57集
編著者名	黒木裕平
編集機関	西都市教育委員会
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市望陵町2丁目1番地 TEL 0983(43)1111
発行年月日	西暦 2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村	遺跡番号	北緯	東経		
さいとばるちくいせき 西都原地区遺跡 (守原遺跡)	宮崎県西都市 おゆあざみやましみやまぐらぐち 大字三宅字原口 ひのじや 二ノ西 他	452084	1027	32° 06' 45" 32° 07' 34"	131° 23' 30" 131° 24' 15"	20080428 20080526	1,371

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たばこ耕作天地 返しに伴う調査	生活遺構	弥生	住居跡 土坑 溝状遺構	弥生土器	

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 57 集

「市内遺跡発掘調査概要報告書 14」

西都原地区遺跡

平成 21 年 3 月 31 日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 イマイ印刷

